

アージャーヴィカについて

雲 井 昭 善

序

佛教文獻の中には、佛教者以外の學說、思想が傳えられている。佛教者は、これらの學說、思想を總稱して、一般に外教思想と呼ぶのである。ところで、この外教思想こそは、佛教にとつてのみならず、インド思想全般に對しても亦、大きな比重をもつものであることは、言うまでもない。特に、宗教と社會的基盤の問題を論じようとする場合、忽諸にできない課題の一つとなろう。

さて、このような、佛教文獻に傳えられる諸思想の中で、特に取り上げてよい思想が二つある。一つは、いま、ここで論じようとするアージャーヴィカ (Ajivika) であり、他の一つはローカーヤタ (Lokāyata) である。この兩者は、何れも、佛教興起の前五六世紀のインドに現われた、自由思想家の一群によつて代辯される思想であ

る。勿論、佛陀時代の代表的思想家群としては、かの六師外道を取り上げるべきであらう^①。しかもなお、特に、アージャーヴィカとローカーヤタを取り上げようとした意圖は、この兩者が、時代思潮を代辯するに足る思想であつたと同時に、他面、一つの宗教團體として、佛教興起の時代に活動をした有力な宗教團體でもあつたからである。とりわけ、アージャーヴィカは、比丘サンガにとつて多くの問題を提出している上に、佛教教團との交渉も多い。従つて、佛教教團に對する影響力も、見逃すことはできない。又、ローカーヤタにしても、インド唯物論を代表する哲學學說として、夙にその學派存在を云々され、加えて、佛教經典はもとより、インド哲學の論書において論議された學派である。特に、アージャーヴィカが佛教經典において邪命外道と呼稱される一方、ローカーヤタは順世外道と稱されている。このことは、佛教文獻

に傳えられる諸外教思想の中の、代表的外教思想としての存在價值を示すものであり、同時に、佛教者にとつて、極めて有力な外部團體の一つであつたことを實證するに十分である。果してそうであつたであらうか。この小論は、第一には、以上の諸點を裏づけるためになされたものである。

なお、この小論と關連して、筆者は、かねて小稿を發表した。^④この稿も、それと資料的に多く重複する點もあらうが、ここに附記して、前記小論を補正したい。なお、アー जीविकाに關する纏まつた研究書として、A. L. Basham; *History and Doctrines of the Ājivikas*. London. 1951 を挙げねばなるまい。^⑤

一

この小論の問題點は、凡そ、次の三點に集約できる。先ず第一には、佛教文獻において邪命外道と呼んでいることとアー जीविकाの教義との關係。第二には、アー जीविकाの教義に對するゴータマ佛陀の批判。第三には、アー जीविका教團と佛教教團との交渉からみたアー जीविका教團の活動。この三點に焦點をおいて、以下に論述したい。資料は初期佛教資料に多くよつた。

アー जीविका (Ājivika) は、又、アー जीविका (Ājivaka) とも呼ばれる。佛教興起の時代、即ち紀元前五六世紀頃のインドに現われた宗教、及びその教義を信奉する宗教團體である。この派の代表者は、佛陀時代に在世した^⑥と傳えられる六師外道の一人、マツカリ・ゴースアラ (Makkhali Gosāla) とされている。彼の思想については、後にもふれるが、初期佛教資料の傳承によれば、多少の混同は免れ得ないとしても、ほとんど一致している。^④しかし、ゴースアラを以て、アー जीविकाの教祖、又は代表者とするには、多少の異議がある。というのは、ニカーヤによれば、ゴースアラと並んでナンド・ヴァツチャ (Nanda Vaccha) とキサ・サンキッタヤ (Kisa Samkicca) の二人が、併記されている場合がある。^⑦しかも、それらの敘述によると、ゴースアラに先立つて、上記の二人の名が挙げられている。即ち

然るにアー जीविकाは自讃毀他す。而して三人の先達者あり。Nanda Vaccha, Kisa Samkicca, Makkhali Gosāla である。^⑧

云々というのが一般である。このことは、ゴースアラの先達者として、ナンドとキサの二人を掲げることによつて、アー जीविकाの傳統系譜を意味しているのかも知

れない。然し、そのことを實證するに十分な資料を用意できないので、今は、ゴーサーラだけがアー जीーヴィカの代辯者とすることには異論があるということに、とどめておきたい。

ところで、アー जीーヴィカと云えば、直ちにゴーサーラを以て代辯せしめることも、全く所以なしというのではない。特に、彼が六師外道の一人として、佛教興起時代の自由思想家群の有力者として活動したこと、或いは、ジャイナの教祖ニガンタと修行をとにしたこと、及びマツカリ・ヴァーダ^⑨ (Mukhali Vada) として特に取り上げられた點などからすると、彼をアー जीーヴィカの派祖とする理由も十分である。かつ又、ナンダとキサの二人については、その教義、活動に關する何等の紹介も與えられていない。これらの諸點を綜合して、アー जीーヴィカと云えばゴーサーラを以て代辯することに、何等の疑義を挿まなかつたのであらう。

さて、このゴーサーラを中心とするアー जीーヴィカは、時として裸形派、裸形外道と混同される^⑩。その理由は、ゴーサーラ等が *Acelaka* (裸形徒) とも呼ばれた如く、裸形の生活をしていたことに由來する。そして、この裸形の生活そのものが、當初、ニガンタと修行をと

にしながら、後に袂をわかつた所以でもあるし、又、佛教の比丘サングの兩期衣設定の一理由ともなつた^⑪。かくして、離繫派のニガンタと混同されやすいために、アー जीーヴィカとアチエーラカとを區別する場合も生じたのである^⑫。

このように、アー जीーヴィカは、一面、裸形派と呼ばれたが、他面、苦行派であつたと傳えられている^⑬。

さて、このゴーサーラ等のアー जीーヴィカについて、佛教經典、特に漢譯語例に従えば、初期資料における阿夷維外道 (『阿時婆、阿耨毘迦、阿耨毘』等の音寫と並んで、後代の資料では邪命外道と稱してきた。しかも、その譯語例によれば、

如^⑭邪命等^⑮者即是阿時縛迦外道。應云正命。佛法毀之故曰邪命。(點筆者)

と、傳承されている。ここに一つの問題となる素材がある。この譯語例によると、アー जीーヴィカは、本來、正命と言うべきであるが、佛教者側で、これを毀つて邪命と言つたという。してみれば、アー जीーヴィカを邪命外道と稱するのは、佛教者の貶稱であつて、アー जीーヴィカそのものには、邪命という理由はないと言うべきである。然し、われわれは、この語をそのまま承認してよい

であろうか。問題のいと口を、先ず、この點から探つてみよう。

從來、アー जीविकाを説明する場合、一般的には、*《生活 (ājīva)》*を得る方法として修行をなすもの^⑧であつて、*《その方法は、この宗派としては正しい、けれども、佛教からみれば邪命である》*と、紹介されてきた。この解説は、前述の漢譯語例に負うものであることは、論を俟たない。従つて、若し、この説明に準據する限り、アー जीविकाを邪命外道と呼稱するのは、佛教者の價值批判から派生したものであつて、アー जीविकाそれ自體は、*《生活を得る方法として修行する者》*に名づけた一派である、と理解しなければならない。然し、事實はそうであつたであろうか。その正否の決定に先立つて、われわれは、邪命派という呼稱は、單に佛教者の貶稱であつたか否かを検討してみたい。

二

先ず、アー जीविका、若しくはアー जीविकाという語の由來から検討しよう。これらの語は、*ājīvika*, or *ājīva-ika* であつて、語義通りには生活する者、生活派^⑨という程の意味である。然し、これに對して、生活を

缺く者、即ち、他人の施によつて生活する者 *a-jīva-ika* → *ā-jīvaka*, *ājīvika*) と解する説もあるが、この解釋は、検討の餘地が十分にあらう。それよりも、この語義をサセストするに足る資料を、われわれは、ニカーヤ及び初期資料の中に求めてみたい。

アー जीविकाが、裸形派 (*Acelakā*) と混同されたように、アー जीविकाは、裸形派でもあつた。従つて、これを、アー जीविकाの語義とみる解釋が見出される。例えば

われ生涯を通じて (生命のある限り) 裸形たらん。如何なる衣裳をも纏わざらん^⑩

(*Yāra-jīvaṇi acelako assaṇi, na vatthaṇi paridaheyaṇi*)

と、いう一文が擧げられる。ここでは、アー जीविकाの *a* を *yāva* に理解して、*“生命のある限り、その限り”* という點に、アー जीविकाの語義釋を與えようとしたのである。Basham 氏も、この點に觸れているが、^⑩この語義釋は、アー जीविका || 裸形派という理解が、異議なく成立することを前提としている。然し、結論的に言うならば、アー जीविकाが裸形徒であつたことが、しばしば經典に傳承されている故に、この語義釋は、一應、考慮されてよいであらう。

もう一つ、他の資料を掲げよう。それは、ジャータカ資料に伝えられる物語りである。^③それによると、こうである。

梵與王 (Brahmadatta) がバーラーナシー (Varanasi) で國を治めていた時、五百人の商人が離船して、たつた一人だけ助かつた。彼は、衣類を剥ぎとられ裸のままで、カルマビヤ (Karmabiya) という濱邊にうち上げられた。彼は、そこで裸のままで港をさまよひながらも、「われは生活の方法を見出した (I addho me jivik'opayo)」と、つぶやいた。港の人々は、この青年が少欲にして満足しているかに見えたので、上下の衣服を進呈しようとしたが、彼は受け取らなかつた。云々と。

この物語りは、前記の語義釋と相通するものであることは、言うまでもない。ここでも、裸形で生活するという方法を見つけたことが、裸形派アー जीविका であることの理由としている。

元來、アー जीविका の徒が裸形の生活を送つたということは、多くの初期佛教資料の一致した傳承である。

例えば、

(1) 佛が、その昔、菩薩であつた時に、外道の教えを探究しようとして、アー जीविका の出家者となり、裸形で、身に塵土を塗り、世を避けて住んでいた。不淨物を食ひ、小牛の糞を食つたが、それに執著することは益なし、と知つ

た。

云々という資料。^④

(2) ナンダ・ヴァツチャやキサ・サンキツチャ及びマツカリ・ゴーサーラ等は、裸形であつた。

という資料、或いは

(3) 六生類 (chalabhiyo) 説に配當すると、アー जीविका は白生類 (sukka) ナンダ、キサ及びゴーサーラは極白生類 (paramasukka) であつた。

という資料など、その好例である。従つて、アー जीविका の徒が裸形であつたということは、當然に認められてよいことであり、その限りにおいて、上掲の二つの語義釋は、何れも考慮に値するに十分である。

このように、アー जीविका || 裸形派ということが肯定されると同時に、又、次のようにもいわれる。即ち、初期佛教資料では、彼等が苦行派の一種として、且又、種々、不作法な行儀を習慣としていたと伝えられる。この記述は、アー जीविका の宗團的生命を左右するに足るものであり、又、それ故にこそ、ジャイナ教や佛教の教團より批判の對象となつたのである。そこにアー जीविका が、佛教者から邪命派と呼ばれた一班の所以を探つても、何等、奇異の念を抱かせるものではない。例え

ば、

(1) アーजीヴィカの苦行者が、或いはうずくまり、身體を支え、或いは蠅(こば)のように樹の枝に下り、或いは棘(いばら)の上に坐し、或いは五火を以て身を焦し、その他種々誤まつた苦行をなす。⁽²⁴⁾

(2) 彼等(ゴースアラ)は、裸形にして不作者で手を舐める者。⁽²⁵⁾

(3) 牛糞を食としている。⁽²⁶⁾

云々等の記述が、うかがわれる。ここでは、苦行者アージーヴィカの徒が、單に裸形者たるばかりでなく、不作者であつたことが、注目される。⁽²⁷⁾そして、この點が、佛教者をはじめ、他の宗派から厳しく批判された。それについて、經典は次のように傳えている。

「ただ衣服を捨てて裸形となり、儀禮を無視して種々の苦行をなすだけで、沙門とか、バラモンとなることは難かしい」というのは當らない。若し、それ(裸形で苦行する)だけで、沙門、バラモンたりうるというのなら、在家の子供だつて、水汲みの婢女だつて「われ、裸形たらん。儀禮を無視せん、苦行をなさん」と言うだろう。然し、そうした苦行や裸形よりも外に沙門、バラモンたりうる困難な方法がある。それは、悲心なく、害心なく、慈悲心を修し、煩惱の汚れない心解脱を得ることである。かくてこそ、眞の沙門となり、バラモンたりうるのである。⁽²⁸⁾

云々と。この批判は、勿論、佛教者のアージーヴィカ裸形徒に對するものであるが、この點、アージーヴィカの徒は、身體の修習(kāyabhāvanā)を重んじて、心の修習(cittabhāvanā)を重んじなかつたという經典も、⁽²⁹⁾右の線に沿つて理解すべきであらう。なお、このアージーヴィカが、不作者で、極めて不潔、不淨であつたかを物語る一資料を掲げよう。⁽³⁰⁾

佛が舍衛國ジェータ林に住んでいた時、ヴィサーカ・ミガラ・マター(Vissakha Migara-mātā)という居士女があつた。彼女は、「明日、比丘サンガに施食しよう」と思い、召使女を比丘衆の許に遣わして招待した。ところが、たまたま、その夜、大豪雨が降つたので、比丘衆は雨にぬれて衣を脱いでいた。それを見た召使女は「僧團(saṅgha)には、最早や比丘はいない。これはきつとアージーヴィカによつて占領されたので、アージーヴィカの徒が裸になつているのに違いない」と早合點した。そして、その旨を主人のミガラ婦人に傳えた。ミガラ婦人は、「比丘衆がきつと雨にぬれたのであらう」と想い、改めて、比丘サンガに施食した。そこで佛は、「裸形は不淨で醜惡である。雨浴衣(Vasikasaṅkā)を設けよう」と言つた。

と。このエピソードは、比丘サンガとアージーヴィカとの混同を避けた一つの證左である。

三

さて、アー जी ヴィカの徒が、裸行者であり種々の苦行生活を送っていたことを知った。しかも、彼等は、裸行の生活から儀禮を缺くことが多かつたと伝えられる。だからと言って、儀禮を缺いた生活そのものが、直ちに邪命だと言いきれるか否かは、なお、検討する必要がある。ただ、アー जी ヴィカの生活態度を傳える經典資料の中で、特に目立つた行爲として、注意されるのは、彼等が、しばしば牛糞を食する徒 (*guhakadaka*, *guhakhadin*) と言われる點である。例えば

(1) 佛が王舎城の都に近い竹林精舎に住していた頃、ジャムブカ (*Jambuka*) というアー जी ヴィカが在つて、マガダやアング國の人々の信仰をあつめていた。この苦行者は、岩の上に乗つて岩の凹みに大便をするところで、片手で岩に身を支え、一糸まとわぬ裸體で片足をあげ、片膝で立つていた。人々は、食物や衣服を供養したが、「裸形には必要なし」と言つて受け取らなかつた。この物語の前生譚として、彼は、前生で或る居士から布施をうけていた長老であつた。ところが、或る日、この居士から新しく供養を受けた漏盡の比丘をねたみ、「汝は、居士の家で食をとるよりも牛糞でも食つた方がよい」と言つて譏つた。その結果、彼ジャムブカは、王舎城の長者の家に再生したが、子供の

頃から裸體で歩きまわり、アー जी ヴィカの行者になつた。ジャムブカは行者になつて托鉢したが何時も便所で糞を喰つていた……云々。⁽¹³⁾

(2) 兩手が没するまで糞坑に沈み、糞を喰うバラモンあり。云々。⁽¹⁴⁾

このような諸資料を綜合すると、アー जी ヴィカの徒が、世間の慣習を捨てて、不潔な生活を敢てしても、なお生きるという生活態度をとつていたようである。そこに、誤まつた生活方法||邪命という理解も成り立つと考えられる。然し、この結論を用意する前に、別の角度から、アー जी ヴィカの内容を検討してみたい。

元來、邪命に對立した生活と言へば、勿論、正しい生活、即ち正命 (*sammāṭṭha*) である。これは、例の八支正道、聖八支道の一つであり、その意味からすれば、本來、邪命そのものに相當する原語としては *micchāṭṭha* (*Skt. mithyajīva*) が豫想される。この場合、正命が邪なる生活を捨てる (世間的正命、なお出世間的正命として無漏心にして聖道を修す)⁽¹⁵⁾ ことである以上、先ず、佛教における邪なる生活の内容を問題とすべきであらう。

この點について、邪命の内容を語る資料を見ると、(1) 他人の信施を食し、謔を言い、〔雜論、迷論を以て世論を迷わす〕遮道無益の法を行じ、利益の上にも利益を貪る⁽¹⁶⁾

食^②他信施。行^③遮道法。邪命^④自活。瞻^⑤相男女吉凶好醜。及相^⑥畜生。以求^⑦利養。

(2) 穀酒を呑み、姪欲の法を習い、金、銀を好み、邪命によつて生き、邪命を離れず。

云々、等の内容が與えられている。そこで、問題はこれらの邪命生活の内容と、ゴーサーラを初めとするアージャーヴィカの徒の生活態度との關連にある。これに關連して、マッカリ品に傳えられるゴーサーラ説が取り上げられてくる。そこでは、

比丘らよ、われは、かほどに、多くの人々の無益のために、多くの人の無樂のために、多くの人の不利益のために、振舞う人を他に一人として見ない。彼は即ちマッカリ・ゴーサーラである。譬えて言えは、河口の入口に網を敷設し、多くの魚類に損害と苦と損傷、喪失を招くようなものである。このように、マッカリという愚人は、人間の網として世に生れ、多くの人々に損害と苦と損傷と喪失を招來する者である。

と、記している。では、ゴーサーラが、何故に人々に苦を招く者として記述されたか、この點に觸れてみよう。ゴーサーラが人間の網とまで極言された所以は、彼の思想に由來しているようである。

周知のように、ゴーサーラの思想には、二つの特色がある。

④ 人間が煩惱に汚されるのも清淨になるのも、すべて無因無縁である。善因善果、惡因惡果という如き因果關係は存在しない。善惡を自ら行うことも、他人に行わさせることもなく、努力精進もなければ自由意志とでもない。人間は、自然の定まり (niyati) 自然の性質 (bhava) によつて互いに異なるのであり、生れながらにして六種の階級に區別される。

⑤ 恰も、糸まりが投げられた時、その糸まりの糸が解け終るまで解けるように、愚者も賢者も輪廻して後に苦の終りをなす。

ここでは、彼の無因無縁論 (Ahetu-apaccaya-vada) と努力無用論 (Niyati-vada) とが、その思想背景となつてゐる。従つて、例のマッカリ・ヴァーダ (Makkhali Vada) において、

業あらず、業果あらず、精進あらず

という批判と對照されるものである。この二つの思想が、ゴータマ佛陀をして「あらゆる沙門論師の中の最惡の論」と語らしめたと考えられる。われわれは、更にゴータマのゴーサーラ批判に耳をかそう。ゴータマは言う。

「ゴーサーラは、人間が煩惱に汚されるのも清淨となるのも無因無縁である」と言うが、無因無縁にして、苦、樂を受けるといふ立場をとる者は、……因あるを無しとみる邪見、因

あるを無しと思惟する邪思惟、因あるを無しと語る邪語者である。ゴースラーは非正法を説く者で、その教説によつて自讃毀他す。^⑭

と。このゴータマの批判と関連して想起される一資料を掲げると、

或るアージーヴィカの弟子である居士が、アーナンダに、「如何なる法が善法、如何なる行いが善行、如何なる人が善逝であるか」と尋ねた時、三毒の滅を説くのが善説、三毒の滅のために行うのが善行、三毒の滅を得たのが善逝、である、と答えた。後、このアージーヴィカの居士はウバーサカとなつた。

云々と。

以上の諸資料を綜合して、ゴースラーの無因無縁論は、ゴータマの佛教からすれば、邪見、邪思、邪語を内容としたものであり、その限りにおいて八正道の正見・正思・正語に相反するものであつた。例えば、

出家したる後、身による惡業を避け離れ給えり。語惡業を捨て已つて、アージーヴァを遍く淨め給えり。^⑮ 語惡業を捨て

という偈文において、アージーヴァを淨め給えり (ajyam parisodhāyī) とは、註釋^⑯によれば邪命を捨てて正命を行うこと (micchājīvam hitvā sammājīvam eva pavattayī) である。このような、初期佛教資料の理解か

らして、アージーヴィカに對する批判が、上述の如きマツカリ・ヴァーダとなつて傳えられたと思う。その批判の聲は、往々にして

アージーヴィカの徒にして、身壞して苦の邊際をなすことなし。過去九十一劫を回顧してみても、アージーヴィカにして昇天した者を知らない。^⑰

という、悔蔑となつて伝えられたのであろう。

四

さて、アージーヴィカに對するゴータマの批判は、主として、ゴースラーの抱く思想に向けられたことは、上述の如くである。特にゴータマにとつて、ゴースラーの努力無用論と業思想の否定が、嚴しい批判となつたようである。この點を更に追究するために、アージーヴィカの徒の生活態度に眼を轉じよう。アージーヴィカの行動の中で、特に取り上げられる點は、佛教敎團等に對して自讃毀他したという記述であらう。例えば、

サンダカ(Sandaka)曰く。希有なる哉、汝、アーナンダよ。未曾有なる哉アーナンダよ。即ち、自らの法を賞めあげず、他人の法を毀らず。……然るにアージーヴィカは、自讃毀他す。而して三人の先達者ありナンダ・ヴァツチャとキサ・サンキツチャ及びマツカリ・ゴースラーである。^⑱

というのがそれである。この自讃毀他という態度は、外部の宗教團體に大きな影響を与えたことは、想像に難くない。勿論、この時代のもつ歴史的背景においては、自らの宗團の發展を希求するあまり、他の有力な宗團を護るということは、當然に考えることではある。特に、この當時、即ち佛教興起時代には、諸種の自由思想家が輩出し、各々の立場を主張して信奉者を獲得しようとした。そして、事實、六師の一人々は、すべて多くの弟子の師 (gāṇacārya) として、サンガを有し (saṅghin) 弟子を有し (gaṇin) 教祖 (tīthakara) として大衆に尊敬されていたと言われる^⑤。その點、ゴースアラの抱いた思想そのものの功罪はしばらく措くとして、彼の思想を支持する人達も多々あつたことは、當然に認められてよい。ただ、ゴータマにとつて、ゴースアラの思想は、社會道徳を無視するものとして、強く批判の對象となつたことだけは、卒直に認めねばならない。この點が、ジャイナのニガンタとも袂を分つ原因となつたのであり、又、比丘サンガと、種々のトラブルを生む原因となつたわけである。では、比丘サンガとアーजीヴィカとの關係、交渉は如何であつたが、この點について觸れてみよう。

これについて、以下、ビナヤ (Vinaya) の資料等に傳えられる、二三のエピソードを掲げて理解の資としたい。

(1) 先ず、比丘サンガに別衆食 (saṃbhojana) を設定するに至つた理由を語る資料について。

マガダ國王ビンビサラー (Bimbisāra) の血縁者で、アーजीヴィカ教團に出家した者があつた。そのアーजीヴィカの徒が、或る日、「大王よ、われ、一切の沙門に供養食をなしたい」と申し出た。ビンビサラー王の言うには、「若し、佛を上首とする比丘サンガに第一に食を供養しようというのなら、供養をせよ」と。そこで、このアーजीヴィカは、諸比丘の許へ使者を送つて、「諸比丘よ、明日、自分の請食を受けよ」と、伝えしめた。比丘は、「ガナ・ボージャナは禁じられているから」と言つて、その招待を受けなかつた。そこで、かのアーजीヴィカは世尊の許へ行つて、「ゴータマも出家者なれば、われも出家者である。出家者が出家者の施食を受けるのはふさわしい。明日、わが施食を受けよ」と、言つた。世尊は默然として、「諸比丘よ、沙門施食時において別衆食を許す」^⑥

云々と。これは、勿論、ガナ・ボージャナ設定に關する一エピソードであるが、出家者としてのアーजीヴィカが、同じ出家者としてのゴータマと同位置で語ろうとした點に、一つの特色が見うけられはしないか。

(2) 佛教の歸依者であつたビサーカーによつて、アーजीヴィカを信奉していたミガラ長者が佛門に入つた。ために、アーजीヴィカの徒は、このミガラ長者に迫害を加えた。^㉔

(3) 一人のアーजीヴィカあり。僧次食 (Sringaphatta) を受けた。ウパナンダ比丘が遅れて来て、食事がまだ終つていないのに次座の比丘を起たしめたので、アーजीヴィカの叱責をうけた。^㉕

(4) 一人のアーजीヴィカが比丘サンガへ来て、分食を乞うた。一比丘、アーजीヴィカに、多くの酥をつけて大きい團食を與えた。友人のアーजीヴィカが、そのアーजीヴィカに言つた。「友よ、何處でその團食をもらつたか」と。かのアーजीヴィカ曰く、「かの沙門ゴータマ、禿頭沙門 (Mundakasana) の分食でもらつた」と、其の後、このアーजीヴィカは、このことを世間に言いふらした。一人の居士がこれを聞いて、比丘サンガの所へやつて来て「かの外道アーजीヴィカは、佛を誹謗しようとし、僧衆を誹謗しようとしている。諸大德は、外道アーजीヴィカに、手ずから與えてはならない」と、言つた。そこで、「何れの比丘と雖も、裸形外道に手ずから嚼食、噉食を與えてはならない」という戒が設けられた。^㉖

(5) 舍衛國に一人の未亡人が住んでいた。婦人に一女あり、これを他村のアーजीヴィカの弟子が見て、「この女をわれに與えてほしい」と言つた。未亡人は「私は、あなたが何處の何家の人であるか知らないから、一人娘を他村へやれ

ないと答えた。そこで、このアーजीヴィカは、ウダイ (Uday) という長老比丘に仲介の勞を依頼し、ようやく、妻として、その女をめとつた。然し、このアーजीヴィカは、一ヶ月後から下女、婢女として使つて妻としては扱わなかつた。娘は、實家へ歸つて離婚を願つたが、アーजीヴィカは、これを受けつけなかつた。加えて、その未亡人はもとより、仲介人ウダイにも恥辱を與えた。^㉗

(6) 多くの比丘衆が舍衛城へ歸る途中、盜賊に衣を奪われた。比丘たちは、かねてより、知らない村へ行つて衣を乞うてはならないという世尊の言葉を思い出して、裸形のままで、アーजीヴィカの風をして、舍衛城へ歸つてきた。そして、他の諸比丘たちに挨拶をしたところ、「アーजीヴィカがわれわれに挨拶をした」と間違えられた。裸形の比丘たちは口々に「われらはアーजीヴィカに非ず、比丘なり」と言つて、誤解を解いた。^㉘

これらのエピソードは、その何れを取り上げてみても、アーजीヴィカと比丘サンガとの對立を暗示している。アーजीヴィカは比丘サンガを譏り、比丘サンガはアーजीヴィカと間違えられることを心よしとしなかつた。この兩者の間には、絶えず軋轢があつたようである。そこには、常に相對立する意識の底流があつたことを、知るのである。

尤も、ニカーヤの諸處には、^㉙

ゴースーラがサンガを持ち、ガナを有し、弟子を有し、弟子たちの師として、よく世間で知られ (fāra) 名高く (Cassa-sino) 教祖として大衆に崇敬されていた。

という記述が伝えられている。なお又、サハリー天子がマツカリを評して

苦行と厭離とによつてよく自らを制し、人々と語り、争うことを止め、罪ある語を離れ、平等に實を語る。どうして彼が、惡をなすことあらうか。

と、賞讃した如き偈文が伝えられている。これらの記述は、われわれが指摘してきた如き、ゴータマのゴースーラ批判と相矛盾するかに思われる。然し、それは、ゴースーラの一派が、アーजीヴィカとしての教團を有していたことを裏づける一資料として、提出されたものであつて、ゴータマの批判とは、一應、別個に考えるべきであらう。何故ならば、ゴータマの批判には、常に、「ゴースーラ等は無上の正等覺を得なかつた」と附言していたからである。ただ、ゴースーラを初めとするアーजीヴィカが、佛陀時代かなりの勢力をもち、且、宗團としての體制を持っていたことは、事實である。では、こうしたアーजीヴィカが、當時のインドの如何なる地方で、主として活動していたであらうか。この設問は、ゴータマの場合と比べて考察してよい問題である。

ゴータマ佛陀が、出家して一沙門となり、王舍城を目ざしたことは周知のところである。このことは、王舍城が、當時の新興勢力の都市國家の一つであつたマガダ國の首都として、隣邦バギー國の首都ヴェーサーリー (Vesālī) と比肩される文化の中心地であつたことを物語っている。ジャイナのヴァルダマーナ (Vardhamāna, Nigantha) は勿論、舍利弗、目連の師であつたと伝えられるサンジャヤ (Sañjaya) もそうであつたように、アーजीヴィカも亦、王舍城とヴェーサーリーを中心として活動していたことが窺われる。例えば

(1) 裸形徒のカンダラマスカ (Kandarāmasaka) が誓つた七つの誓戒の中で、「われはヴェーサーリーの東はウデーナ (Udena) 廟を、南はゴータマカ (Gotamaka) 廟を、西はサッタンバ廟 (Sattamba cetiya 七聚廟) を、北はバフプッタ廟 (Bahuputta cetiya) を超えて往かざらん^⑤。

と言ひ、又

(2) 佛成道後、初轉法輪のためにベナレスへ向う途中、アーजीヴィカのウパカ (Upaka) に出會つた。

(3) 大迦葉、五百の比丘とバーバ (Pāba) からクシナガラ (Kusinagara) へ赴く途中、一人のアーजीヴィカが曼荼羅華を携えて來て、世尊の入滅を告げた。

等の二三の資料によつて、その活動範圍が、ほぼ想像さ

れる。

以上、アーजीヴィカに關する教義的な面とその活動面、及びそれに對するゴータマの批判について、經典に傳えられる種々のエピソードを道しるべとして述べてきた。勿論、これらの記述は、それが初期佛教聖典に傳えられたものとしての枠を免れ得ないとしても、佛教興起時代におけるアーजीヴィカの一端は、十分に窺われるであろう。特に、宗團としてのアーजीヴィカと比丘サンガとの交渉を傳える多くのエピソードは、われわれに、この時代の宗教團體の動きを暗示するに十分である。佛教聖典の中には、アーजीヴィカにして、後に佛教徒に轉宗した記録を傳えている。^② 反面、このアーजीヴィカ一派が、後世、アソーカ (Asoka, Asoka) 王時代や、その孫の十車 (Dasaratha) 王の時代に、國王の支持を受けたことも傳えられている。その點、宗團としてのアーजीヴィカの勢力の消長は、アーजीヴィカの教團史として、又、一課題たるを失わない。^③ ただ、われわれが上に見てきたように、初期佛教資料よりする理解を以てすれば、最初に掲げたこの小論の三つの設問に對して、次の如き結論を用意できると思う。即ち、(一)アー

命外道と呼ぶことは必ずしも佛教者の貶稱ではなくて、ゴースラーの教義それ自體にも、内容的には窺われるということ。(二)アーजीヴィカに對するゴータマの批判は、他の學說、思想に對してとつたゴータマの寛容的な態度に比べて、嚴しい批判を以て答えていたということ。(三)比丘サンガに對するアーजीヴィカ教との關係は、頗ぶる對立的であつたということ。以上の三つの結論を以て、この小論を終りたい。(一九六〇・四・一)

註

① 六師外道に關しては、宇井博士、「六師外道について」『印度哲學研究』第二卷三四七～四二三頁) 參照。

② ローカーヤタ思想に關しては、龍山章眞氏「順世派資料論」『宗教研究』新第十一卷四二五頁以下) 參照。拙稿、「初期佛教資料における順世 (Lokāyata) 思想について」『印度學佛教學研究』第五卷第一號一八〇～一八三頁)。

③ 佛陀時代のアーजीヴィカについて『印度學佛教學研究』第七卷第二號、五二二～五二五頁)。

④ 本書の他に、アーजीヴィカに關する論稿を擧げるなら
A. F. R. Hoernle; *Encyclopaedia of Religion and Ethics* I. P. 259f. Kern; *Der Buddhismus und seine Geschichte in Indien*. 2 Bde. Barua, B. M. The *Ājivikas*. JDL. II. 1920. pp. 1~80. Banerji Sastri A. JBORS. XII. 1926. pp. 53~62.

(5) SN. Vol. I. p. 66 の偈文「既にサンニヤヤを除く五師の名が擧げられてゐる。このことは「沙門果經」の六師を俟ひまでもなく、佛陀在世時代の思想家であつたことを證しつゝである。cf. D. II. p. 150, S. IV. p. 398.

(6) コーチャーラの思想に關しつゞ

Sāmaññaphala-Sutta (D. Vol. I. pp. 53~4) 漢譯「沙門果經」(大正・一・九五~九九)「寂志果經」(大正一・二一四〇) M. No. 76 Sandaka-Sutta. (M. Vol. I. pp. 516~7 大正一・二五十一~二五二) M. No. 60. Apannaka-Sutta (M. I. pp. 407~) S. Vol. III. pp. 61, 210; AN I. p. 33 (Makkhali-Vaggo) 同「マシタ説」に歸せらるゝと云ふので、このコーチャーラ説として記載せられたりしてゐる。特だ「マシタ」のコーチャーラとの異同がはげしう。

(7) M. I. p. 237, 524; A. III. pp. 383~4; DA. I. p. 162. SnA. I. p. 372; MA. II. p. 632

(8) M. I. pp. 524~; cf. DhA. II. p. 52; A. III. p. 384; MA. II. p. 285, 632; DA. I. p. 162; SnA. I. p. 372. etc.

(9) A. I. p. 286

(10) M. I. p. 238 じはコーチャーラを擬形してゐる。S. II. p. 19 じは⁴ acela⁴ka Kassapa といふ。M. I. p. 237 じは⁴いざん⁴と⁴迦⁴陀⁴の⁴。

(11) Vin. I. pp. 290~1

(12) なまアーシローウイカとマデヘーラカとを區別する場合に⁴あ⁴の⁴ DhA. I. p. 309. kadāci acela⁴ko hoti, kadāci

ājīvako, kadāci nigāṇṭhako, kadāci tāpaso

(13) Jāt. I. p. 493; cf. M. I. p. 238

(14) 「成唯識論述記」第一末(大正・四三・二六六上)

(15) 宇井博士『印度哲學研究』第二卷「三七頁、中村元博士『ヤン思想史』四二頁《生活法に關する規定を嚴密に解釋する節》

(16) *Ājīvika* (*ka) [ājīva + ka]. "one finding his living" an ascetic, one of the numerous sects of non-buddhist ascetics. (*ājīva* livelihood, mode of living). living. subsistence. (s. v. PTS. Dict. *Ājīvika*, *Ājīva*)

(17) Burnouf; Le Lotus de la Bonne Loi. p. 777

(18) D. III. p. 9ff.

(19) Basham; History and Doctrines of the *Ājīvikas*. p. 102 ff.

(20) Paṇḍara Jāt. Jāt. V. p. 75 ff.

(21) Lomahansa Jāt. Jāt. I. pp. 390 ff

(22) M. I. p. 238

(23) A. III. pp. 383~4

(24) Naṅguṭṭha Jāt. Jāt. I. p. 493

(25) M. I. p. 77ff, 238; cf. D. I. p. 166ff

(26) DhA. II. p. 52; cf. S. II. p. 259; M. I. p. 78; D. I. p. 166

(27) M. I. p. 238; D. I. p. 166; II. pp. 40~41

(28) D. I. pp. 168ff; cf. S. II. p. 19

(29) M. I. p. 238ff

- ③⑥ Vin. I. pp. 290~1
- ③⑬ ミガール婦人の主人公に「うづは」 Dhpa. I. pp. 390ff.
Visakhya-Vaithu.
- ③⑭ Dhpa. II. p. 52 Jambukāṭivaka; 牛糞を食すといふ
cf. S. II. p. 259; M. I. p. 78; D. I. p. 166
- ③⑮ S. II. p. 259 gūṭhakhadi
- ③⑯ D. II. p. 312; M. I. p. 42; A. II. p. 89
- ③⑰ tirachāna kathā (經道無益語) といふは D. I. pp. 7,
66, 178~9
- ③⑱ D. I. p. 8; cf. p. 67
- ③⑲ 大正一・八九中
- ③⑳ A. II. p. 53; cf. Jāt. I. p. 257 は「一人のアーシー
ヤツカが或る家庭に對して田の吉凶をいふて儚りを告ぐ」。
- ③㉑ A. I. pp. 33ff
- ③㉒ A. I. p. 33
- ③㉓ D. I. pp. 53~4
- ③㉔ A. I. p. 286
- ③㉕ A. I. p. 286
- ③㉖ M. I. pp. 407~8, cf. 516~7; S. III. p. 61, 216; A. I. p. 33
- ③㉗ A. I. pp. 217~9 (大正二・二五一中参照)
- ③㉘ Sn. 407°
- ③㉙ SnA. I. p. 382
- ③㉚ M. I. pp. 483ff
- ③㉛ M. I. pp. 524ff. cf. Dhpa. II. p. 52; A. III. p. 384;
DA. I. p. 162; SnA. I. p. 372; M. I. p. 238, 524
- ③㉜ S. I. p. 68; id. IV. p. 398; D. I. p. 48; II. p. 150
- ③㉝ Vinaya. IV. p. 74ff
- ③㉞ Dhpa. I. p. 390ff. Visakhya-vaithu 参照
- ③㉟ Vin. II. p. 165ff
- ④① Vin. IV. p. 91ff
- ④② Vin. III. p. 135ff
- ④③ Vin. III. p. 212ff
- ④④ Kosala-Saṁyutta S. I. p. 68; cf. id. IV. p. 398; D.
I. p. 48, II. p. 150
- ④⑤ S. I. p. 66
- ④⑥ D. III. pp. 9~10
- ④⑦ Vin. I. p. 16
- ④⑧ D. II. p. 162; Vin. II. p. 284
- ④⑨ D. I. pp. 176~7 は「裸形迦葉 (acelaka Kassapa) が
世尊の許に出家して阿羅漢となる。D. III. p. 57 に
なけるニグロダ梵士、及び Dhpa. II. pp. 52ff のシャムブカ
・アーシーヴァカ (Jambukāṭivaka) が、後に佛門に入つて
阿羅漢となった。
- ④⑩ この課題に關しては、前記 Basham 氏の論稿中、第八
章へ第十章 (一四二頁以下) 参照。
(本稿は、昭和三十四年度科學研究費總合研究一分擔課題
・「佛教文獻に描かれたる識者の生態」一助成金による研
究成果の一部である。)